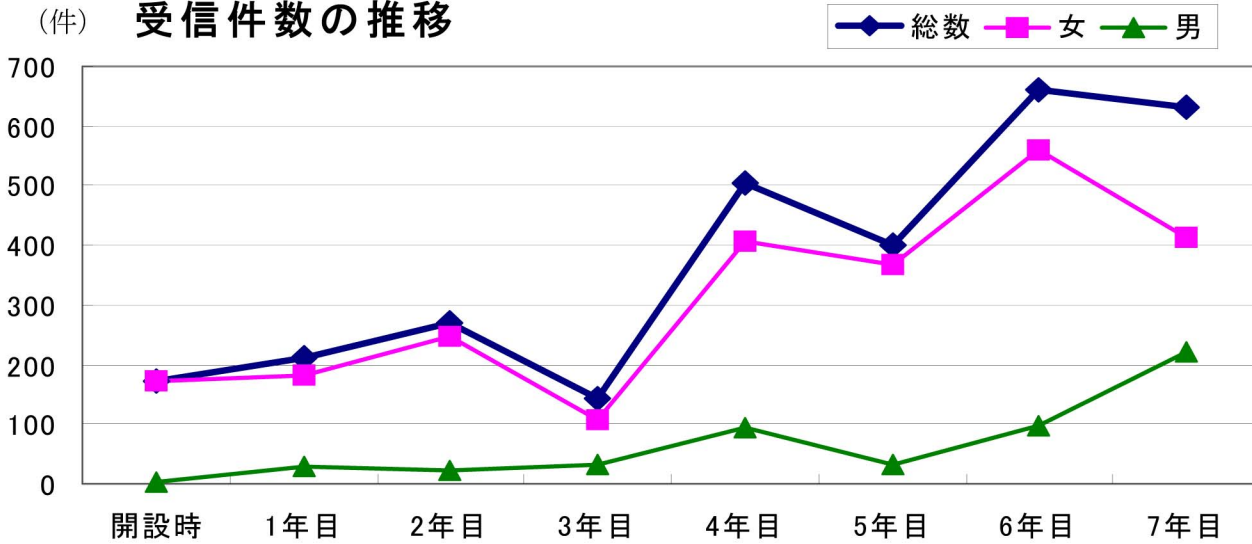


受信件数 7年で4倍に

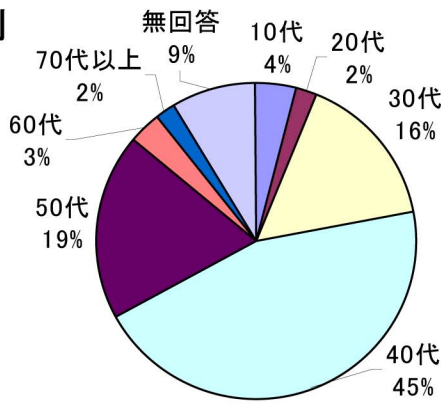
(件) 受信件数の推移



2004年に「傾聴電話」として開設した電話相談は満7年を迎えた。この間に受けた電話は3000件にのぼる。開設当初から「まずこの電話を知ってもらうこと」のために広報に務めた。チラシやパンフレットを配り、カードを置かせてもらったりローカル紙に広告を載せたりした結果、電話の件数が年間でみると約4倍になった。

【2010年10月～2011年9月のデータによる】

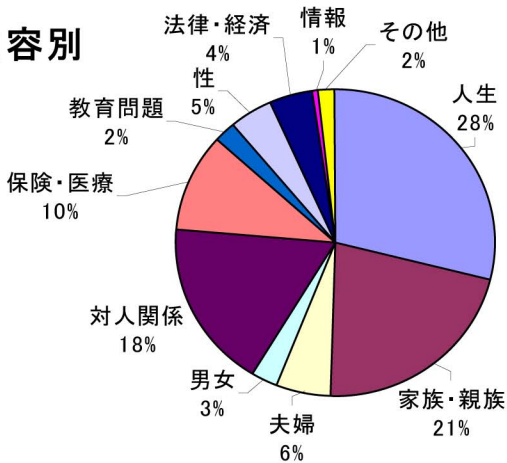
年代別



「若い人が悩んでいる」
開設当初の電話のかけ手は30代の人が圧倒的に多かった。今は40代の人が最も多い。30代40代を合すると60%を占める。内容別の表と合わせて考えると、若い人たちが家族の問題や対人関係に悩み、どう生きていけばいいのかわかると人生に向き合っている姿が浮かんでくる。一方男性や高齢者も少しずつ増えてきているのも確かな傾向だ。

「病気の深刻な悩みはやはり多い」
「死にたい」「殺したい」の訴えは相変わらず多い。特に心の病気の苦しみを聞いている時、受け手は心が塞ぐ思いになり辛い時だ。外にも出られず、話し相手もない彼らにとってはこの電話

内容別

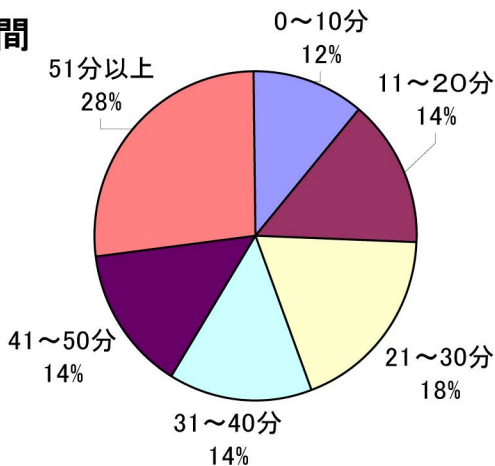


は、唯一の友達となつていいるのかも知れない。「こんな電話があつたんですね。もっと早く知りたかつた」と言ってくれた人がいた。

「震災関係の経験も」
震災直後は震災に対する不安や恐怖で動けないといった悩みが語られたが、最近では被災地にボランティアに行った経験が語られることもある。この震災は直接的間接的に、日本人に生死について自分に問い直すチャンスを与えてくれた。「そこに聴いてくれる人がいることで自分の気持ちを確認できる」そんな聴き手の役割もこの電話は担いたいと願っている。

「公共機関からの紹介も増えた」
最近ではチラシやカードを置かせてもらっていることもあつて、

通話時間



クリニックや相談センターなど、公共施設からの紹介も増えてきた。

「時間は最大60分が目安」
原則としてかけ手が切ってくれるのが電話の終わりだ。ただし、60分を最大の目安にしていることは伝える。

「そろそろ時間ですね」とわきまえて切ってくれる人もいる。サラーマンらしき人が、休み時間を利用して携帯からかけてくることも増えた。

「じっくり話を聴いてもらいたいならぬくもりほっとらいんへ」という感じで紹介されてくる。不安でいっぱいのかけ手は、じっくり話をすることで、落ち着き、問題が整理される。そして自ら問題を解決していかれる場合も多い。